

『新自由主義』イデオロギーとしての『中曽根内閣と臨時行革路線』の イデオロギーの検討

黒田 治夫

A Discussion on the Ideology of "Nakasone Cabinet and Temporary Administrative Reform Route"
as a "Neo-liberalism" Ideology

Haruo Kuroda

要約

日本における「新自由主義」の動きを、4期に分ける。その第1期を、「1980年代の中曽根内閣と臨時行革路線」とする。第4期の「小泉内閣と日本的『新自由主義』の展開」が本格化している今日、第1期のイデオロギーを、この「新自由主義」の動きの中であらためて検討してみる。

「新自由主義」のイデオロギーとして、第1期のイデオロギーをとらえなおすと、中曽根「新国家主義」のイデオロギーは、「新京都学派」の「日本文化論」にみられるように、「新自由主義」の市場万能論や競争主義の強調ではない。そうではなく、市場万能論や競争主義を隠ぺいするために、梅原猛の「和」や山崎正「柔らかい個人主義」や今西錦司の「平和に共存」して「棲(す)み分け」が強調されている。

ゆえに、第1期のイデオロギーは、「新自由主義」のイデオロギーとしては、まだ、成熟していないといえる。

キーワード： 新自由主義 新京都学派 日本文化論 今西錦司 山崎正和

2006年10月13日受領(理論)

はじめに

日本における「新自由主義」の動向を友寄英隆氏は、『新自由主義とは何か』(新日本出版社、2006年)の中で、4期に分けて展開している。その第1期は「1980年代の中曽根内閣と臨時行革路線」、第2期は「アメリカの対日『新自由主義』路線の展開ー1990年代前半の自民党政治の危機と連立内閣」、第3期は「1990年代後半の財界戦略の新展開」、第4期は「小泉内閣と日本的『新自由主義』」である。サッチャー政権・レーガン政権で本格化した「新自由主義」が、日本においてははじまるのは中曽根内閣からとする氏の時期区分は、今日からみると適切であると思われるのでこの時期区分を手がかりとする。

この小論のねらいは、1980年後半から1990年前半に筆者が検討をしてきた中曽根「新国家主義」とそれに利用された「新京都学派」のイデオロギーを、

日本における「新自由主義」の第1期「1980年代の中曽根内閣と臨時行革路線」のイデオロギーとしてとらえなおしてやることである。この検討は、日本における「新自由主義」の動きが本格化している第4期「小泉内閣と日本的『新自由主義』」のイデオロギーを解明するためにも必要な作業と思われる。この検討に1980年後半から1990年前半に書いた書評などを利用することを了解いただきたい。(肩書などは執筆当時のままとする。)

1. ブルジョア科学からの批判ーハルミ・ベフ『イデオロギーとしての日本文化論』(思想の科学社、1987年)^{注1)}

著者は、1930年米国生まれ。戦中、日本で小・中学時代を過ごした日系米国人。現在、スタンフォード大学人類学部教授で日本研究者。

注1)『赤旗』1987年9月28日付

本書において評価できるのは次の点である。今までの「日本文化論」の多くが、日本人は「集団主義」的で「和」や「協調性」を大切にし「温情的家族主義」的であるとしている。しかし、現実には受験競争や出世競争があり、過去には百姓一揆や労働争議が多発しているのであるから、これらの「日本文化論」は決して実証的根拠をもつ論ではない。そればかりか、体制や企業にとっては日本人がそうあってほしいしそうあるべきだというイデオロギー的役割をもつものである、と批判する。

また、日本の「国際化」は日本のアイデンティティーに大きな危機をもたらした。そこで、これらの「日本文化論」は西欧文化にたいする日本文化の「独自性」を強調することを任務としており、「国粹化」の道をたどっている。この意味で、日本の「国際化」は日本の「国粹化」の先導役を果たしている、と指摘する。

このように本書は、中曾根「新国家主義」のイデオロギーとなっている梅原猛、上山春平氏らの日本文化論にたいしてブルジョア科学からの一定の妥当な批判になっているところに意義がある。

しかしまた、本書において問題となるのは次の点である。著者は、一方でこれらの「日本文化論」の「体制」的、「国粹」的イデオロギーとしての危険性を批判するが、他方で文化論はそもそもイデオロギーなのであるから真理である必要もなく学問的な問題としてとやかくいうのは間違いであるといい、問題を相対化してしまう。

しかし、このような相対主義的な立場では、発足し活動を始めた中曾根流「国際日本文化研究センター」にたいする徹底した批判をおこなうことはできない。また、これにたいする正当な批判に水をさすことになる。本書はこのような限界があるといわなければならない。

このように、第1期の「新自由主義」イデオロギーとしての「日本文化論」が、日本人は「集団主義」的で「和」や「協調性」を大切にし「温情的家族主義」的であるとし、この「日本文化論」は体制や企業にとってそうあるべきだというイデオロギー的役割をもつものである。また、日本の「国際化」は日本のアイデンティティーに大きな危機をもたらし、これらの「日本文化論」は西欧文化にたいする日本文化の「独自性」

を強調するという指摘が重要である。

2. その本質を解明・批判――森田俊男著『臨教審と日本人・日本文化論』（新日本出版社、1988年）^{注2)}

本書は、臨教審の「日本人・日本文化論」がどのような「人づくり」をめざしているのかを解明、批判したものである。

第1部「臨教審『世界の中の日本人』論批判」では、臨教審が独占資本にとって有用な「人づくり」をめざしていることが解明される。臨教審は、近代工業文明がもたらした豊かさが人間性を破壊しているといい、独占資本の責任を免罪している。また、そのような近代の行きづまりを「超克」する手がかりは「不易なもの」をもつ日本文化にあるとその優越性を主張する。臨教審のねらいは「世界の中の日本人」を自覚しこの日本文化を「説得的に自己主張」できる「人づくり」であり、その「不易なもの」の中心に天皇制を位置づけることであることを、著者は鋭くつく。これは戦前の京都学派と日本浪漫（ろまん）派の「近代の超克」「世界史的立場と日本」論の再版だと指摘する。

第2部「臨教審『日本文化・日本人』論批判」では、独占資本の21世紀戦略構想にもりこまれている山崎正和の論と臨教審にもりこまれている梅原猛の論とがとり上げられている。山崎は「西洋化」を徹底させることで日本が「普遍的世界文化」の形成に寄与するといいい、梅原は「縄文の精神」「和」に人類の普遍性がありこれによって近代の超克が可能であるといいい、一見、対立をみせている。しかし、二人の論は日本を「文化・イデオロギー大国へ」という意図があらわであり、日本の教育、文化・政治の反動化を支えるという役割では共通のものであると、著者は批判する。

これに対して、著者は戦後民主主義の遺産の継承と、日本の歴史的現実をふまえ、国際的な視野の中で獲得された「国際的合意」（国連・国際平和宣言など）にわれわれの展望があることを示している。

このように、第1期の「新自由主義」イデオロギーとしての臨教審『世界の中の日本人』が、「世界の中の日本人」を自覚しこの日本文化を「説得的に自己主張」できる「人づくり」をめざすものであり、臨教審に取り入れられた山崎正和・梅原猛の論は日本を「文化・イデオロギー大国へ」という意図があらわである

注2)『赤旗』1988年12月12日付

との指摘が重要である。

3. 日本科学者会議思想・文化研究委員会編『日本文化論』批判(水曜社、1991)^{注3)}

本書は、日本科学者会議、思想・文化研究委員会による「日本文化論」と天皇制に関する批判的・創造的共同研究の成果である。四年間の総括的な研究成果ゆえ、以下、少し詳しく内容を紹介してみたいと思う。

第1章「『日本文化論』批判」は、三論文からなる。

岩崎允胤「『日本文化論』の思想史」は、満州侵略から今日までの「日本文化論」を思想的に総観し、その体制的・イデオロギー的性格を明らかにする。

佐藤静夫「<日本浪漫派>の『日本文化論』」は、戦前の<日本浪漫派>の系譜をたどり、今日の「近代の超克論」がその化粧直しにすぎぬと暴く。

北村実「『日本文化論』の変遷と転回」は、戦後の「日本文化論」の変遷を検討し、山崎正和の特殊から普遍への「転回」がアメリカの外圧によることを指摘する。

第2章「『日本文化論』をめぐる」は、五論文からなる。

岩井忠熊「新嘗祭(にいなめさい) 献穀の創出と展開」は、国家神道による「献穀」の創出と展開を滋賀県の場合を中心に検討し、これに地方公共団体が今日も関与していることを告発している。

岩間一雄「太平記とイデオロギー」は、封建権力が天皇制的伝統を克服し得なかったことを『太平記』によって析出する。

鯉坂真「『和』の思想と日本精神主義」は、『国体の本義』の成立過程を検討し、「和」の思想が西田幾多郎や和辻哲郎ではなく日本精神主義者の紀平正美に由来することを解明している。

宮地正人「『日本文化大観』編修始末記」は、戦中刊行の『日本文化大観』の全体構想を復元し、これが天皇制ファシズムの国定版「日本文化論」にほかならないことを明らかにする。

山口和孝「『国際化』をめざす道德教育の『日本化』」は、今回の学習指導要領改訂で「愛国心」育成をどうおこなおうとしているか分析し批判する。

このように、第1期の「新自由主義」イデオロギーとしての「日本文化論」が、山崎正和にみられるようにアメリカの外圧によることをとらえることが重要で

ある。

4. 警戒すべき「文化大国主義」――山崎正和著『日本文化と個人主義』(中央公論社、1990年)を読む^{注4)}

(1) イエ社会論を批判はするが

新保守主義の山崎正和氏が、最近、『日本文化と個人主義』を出版した。この著書は、氏の『柔らかな個人主義の誕生』(1984年)や『文化開国への挑戦』(1987年)とほぼ同様の論旨であるが、以下それをみてみよう。

まず、山崎氏は、村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』の中で展開された「イエ社会」論を次のように評価しつつも不十分であると批判する。

つまり、「イエ社会」論は、西洋のような個人主義が発達しなかった日本が、近代化・産業化を達成できた理由を、国家や企業が「イエ」をモデルにして組織されたからだと説明した。これを山崎氏は画期的な業績だと高く評価する。

しかし、この「イエ社会」論は、出来上がり安定した組織とそこで生きている人間の安定した行動(つまり、企業一家内の集団主義的で協調主義的な行動傾向)についてはうまく説明することができる。しかし、その組織が創設されるとき個人の行動がどのようなものかということについては、とらえることができないという不十分さをもつ、と氏は批判する。

このように、山崎氏は、同じ体制派イデオログの村上氏らを批判してみせるが、近代化・産業化を集団主義・協調主義で達成した日本を世界に誇るものと見なし、それが生じさせた資本主義経済の諸矛盾をみない点では同類である。

(2) 現実の日本を全面的に肯定

また、この批判のあと、山崎氏は次のような自説を展開していく。

そもそも日本には、「イエ社会」の原理(鎌倉時代に成立した農民武士的な組織原理)と「柔らかな個人主義」の原理(室町時代に成立した、商人の行動の原理)の二つが併存しており、この二つがお互いに補いあい競いあって社会を動かし歴史をつくってきたのだと、山崎氏は十分な証明ぬきで主張する。

注3)『学生新聞』1991年12月7日付

注4)『赤旗』1990年10月30日付

さらに、1970年代までの日本は、「イエ社会」の原理が支配的であり、「生産」第一で遊ぶこと（「社交」）などせずつつ走ってきた。しかし以後は、日本社会が多様化し個別化してきて「柔らかい個人主義」の原理が支配的になってきている。この時代には、人は生産ではなく「消費」に、また、仕事にはでなく「社交」において自分らしさを発揮しなければならない。それができる時代、日本になったのだ。

このように、山崎氏は高度成長以前と以後をとらえ、そのどちらも評価する。これはまさしく現実の日本を全面肯定するものである。

(3) 世界秩序の形成原理と

いやそれだけではない。この「柔らかい個人主義」の原理は、今後の日本の秩序を形成する原理というだけでなく、今後の世界の秩序を形成する原理ともなるのだといい、ここに「日本文化の世界性」があるのだと山崎氏は主張する。この氏の主張は、この「柔らかい個人主義」の原理は今後の世界を導くことができるすばらしい指導原理であり、そのような優秀さを日本はもっているのだというものである。これは、新しい文化大国主義の主張である。

このような主張を聞くと、西田幾多郎の「日本文化論」を思い出す。西田は、皇室中心というのが日本文化の特徴であり、これがまた世界秩序形成の原理となるのだと論じた。これが結局、侵略戦争の合理化に利用された。

経済大国から軍事大国へ歩みをつづけ憲法を踏みこじって自衛隊の海外派兵まで政府・自民党・財界がねらう今、山崎氏の文化大国主義のススメに、われわれは警戒しなければならないであろう。

以上のように、第1期の「新自由主義」イデオロギーとしての山崎正和の「日本文化論」は、文化大国主義の主張をする。つまり、日本には、「イエ社会」の原理と「柔らかい個人主義」の原理の二つが併存しており、この二つがお互いに補いあい競いあって社会を動かし歴史をつくってきたと、そして、この「柔らかい個人主義」の原理は今後の世界を導くことができるすばらしい指導原理であり、そのような優秀さを日本はもっているのだというものである。

5. 今西錦司氏の「自然学」——その方法と科学との「訣

別」(『自然学の提唱』、講談社、1984年、『自然学の展開』、講談社、1987年)^{注5)}

80年代後半、「新京都学派」の「日本文化論」が中曾根「国家主義」のイデオロギー強化に利用される状況が生まれた。今西錦司氏は「新京都学派」の中で強い影響力をもっており、また最近、氏について多くの論考がなされている。そこで、氏の「自然学」を検討し、そこで語られる「日本文化論」について検討する。

(1) 機械論をどう乗り越えるか

① 分析的方法の限界を絶対化する

今西氏は、「自然学の提唱」(『季刊人類学』1983年9月)において自然科学を批判し、それとの「訣別(けつべつ)宣言」をおこなう。そして自然科学にかわるものとして氏の構想する「自然学」の提唱をおこなう。

その内容が『自然学の提唱』(1984年)、『自然学の展開』(1987年)にまとめられているのでこの二著書によってみていく。まず、今西氏の「自然科学批判」について、「科学の取り扱うのは、すべて部分に細分された自然であり部分自然であるにすぎない。……いまや科学の進むところ、このすべてのものの母体である全体自然の存在さえ忘れ去られようとしている。」という。

自然科学は部分を取り扱い全体を忘れていると批判する。この批判は、現代自然科学において専門化が極度にすすんだ現状に対する、一定の有効な批判となっている。しかし、このことから自然科学を全面否定する点は問題である。

また、「分析をおこなえばもうその一体のものである自然を切り離してしまっている」からダメだという。

さらに「自然科学の方法論として主体と客体、主観と客観とを切り離して、客観主義に徹するということを守っている限りは全体はとらえられない」という。

さらにまた、「細分化、専門化、分析というような方法を、科学がとり上げている限りは、総合ということはできない。」という。

このように、もともと一体のものを切り離してしまう分析的方法そのものに全体をとらえられない原理的欠陥があるのだと、氏は批判するのである。

注5)『学生新聞』1990年10月20日付

しかしこれはあとでもふれるが、自然科学のもちいる分析的方法の有効性を理解せず、その方法が当然もつ限界を絶対化してしまい自然科学そのものを全面否定してしまう点は今西氏の決定的な誤りである。

②自然の把握は「直観」によって

では、自然科学と訣別した今西氏はどのような方法で自然を一体としてとらえるというのか、またその「自然学」とはどのようなものなのか、次にみてみよう。

「自然に対してですね、エイとばかり達観する。達観によって把握する。あるいは大悟一番という言葉があります。大悟のゴは、悟りですね。悟りをひらいて把握する。……達観とか大悟一番というものものとなるものに、『直観』というものがあることを、ここで指摘したい。」

今西氏は「全体自然」を自然科学のように分析したりせずに、「達観」、「大悟一番」、つまり、「直観」によって把握するというのである。この「直観」が「自然学」の方法だということである。

また、今西氏は自分の「自然学」のとらえかたは道教、老荘思想に近いという。

③東洋の神秘主義思想の評価へ

このような今西氏の「自然科学批判」と「自然学」は、近年流行のニューサイエンスと共通する点があるのでみておこう。

ニューサイエンスは、分析し要素への還元をする近代科学は機械論であるので全体が見失われてしまうのだと主張する。だから近代科学の機械論にかわる新しい見方として「ホーリズム」すなわち、全体を包括できる見方が必要だと主張する。

ニューサイエンスは、機械論的思考の限界につきあたったところから、分析し要素に還元するという近代科学の方法それ自身に原理的欠陥があるのだと全面否定し、それにかわって、一気に「直観」によって全体をとらえようとする。そしてこの近代科学を乗り越える思想として東洋の神秘主義を、氏は評価する。

④全体と本質は分析の総括として

今西氏やニューサイエンスは「機械論」の意義と限界が正しくとらえられていないのである。また分析的方法の意義が理解されていないのである。

エンゲルスは『空想から科学へ』において機械論はスコラ的自然観を打破し近代科学を成立、発展させていく上で巨大な役割を果たしたことを評価している。しかしまた、機械論は機械的な運動は十分にとらえる

が、発展的な運動を全面的にとらえられないという限界をもつことを指摘している。

機械論には限界があるという点に関しては、今西氏やニューサイエンスの批判は妥当な点を含む。しかし、その限界を乗り越え全面的にとらえるのは弁証法であり、かれらが主張するような「直観」ではない。

つまり、運動を全面的にとらえるためには分析的方法は欠かすことができない。現実を詳細に分析することは全体とその本質をとらえるための欠かすことができない認識の一段階である。そして全体とその本質は現実の詳細な分析結果の総括として弁証法的にとらえられるものである。また分析的方法によって全体を弁証法的にとらえた典型がマルクスの『資本論』である。

(2) 日本文化をどうとらえるか

①包容する宗教、「平和に共存」

次に、今西氏の「自然学」がとらえた「日本文化論」がどのようなものであり、それがなにをもたらしのかみてみよう。

今西氏は、キリスト教は「厳しい」自然の中で発生し、その「厳しさ」がキリスト教徒と異教徒、神と人間、人間と自然とを峻別（しゅんべつ）するのだという。そしてこのなんでも峻別し切り離すという伝統の上に西洋文化や自然科学が成立しているのだという。それに対して東洋で生まれた宗教にはそのような厳しさがなく、むしろなんでも包容していこうというところがあるという。そこでこの伝統の上に日本文化や今西氏の「自然学」が成立しているのだという。

また、砂漠地帯に生まれたキリスト教、ユダヤ教、イスラム教が一神教なのは、「自然が乏しい」のすぐ争いになり、それを裁く絶対的な神が必要になるからだという。それに対して日本の自然は大変「恵みぶかい自然」であるから、人間も動植物も仲よく神様さえその中で共存していて汎神論なのだという。

また今西氏は、日本では「豊かな自然」を形づくっている草木も禽獣（きんじゅう）も、虫けらまでもがその豊かさを楽しんでいるように見えるという。さらに生きがために四六時中あくせくしているようなものは、どこにもいないともいう。みんな「平和に共存」して「棲（す）み分け」しているのだという。

②環境決定論が覆い隠すもの

このように、今西氏の「自然学」は西洋と日本とを両極の対立、決定的な対立としてとらえる。そしてその対立、相違を自然環境の違いに還元して説明する環

境決定論となっている。「乏しい」、「厳しい」自然の西洋では宗教も思想もすべてを峻別するものとなりその土壌で自然科学が成立するという。それに対して「豊か」で「恵みぶかい」自然をもつ日本では宗教も思想も包容力のあるものとなり、自分の「自然学」が成立するという。そして日本はすべてのものが生存競争などせず「平和に共存」して仲よく「棲（す）み分け」していると今西氏の「自然学」からみた「日本文化論」を展開する。

しかし、わが国の支配層は国民の犠牲の上に自分たちの利益を最大限追求しているというのが現実であり、そのためにさまざまな諸矛盾が未解決のままである。この「自然学」からみた「日本文化論」は、まさに現実にある諸矛盾を覆い隠す役割をもつものであることを指摘せざるをえない。

以上のように、第1期の「新自由主義」イデオロギーとしての今西「自然学」は、日本はすべてのものが生存競争などせず「平和に共存」して仲よく「棲（す）み分け」しているといい、まさに現実にある諸矛盾を覆い隠す役割をもつものである。

おわりに

あらためて、第1期の「新自由主義」イデオロギーとしての「日本文化論」に対する批判を確認すると次のようになる。

ハルミ・ベフは、イデオロギーとしての日本文化論が、日本の「国際化」が西欧文化にたいする日本文化の「独自性」を強調しているといい、森田俊男は、臨教審が、「世界の中の日本人」を自覚しこの日本文化を「説得的に自己主張」できる「人づくり」をめざすものであるといい、北村実は、アメリカの外圧によることをとらえることが重要であると指摘する。

以上から、「新自由主義」のイデオロギーとして、第1期「1980年代の中曽根内閣と臨時行革路線」のイデオロギーをとらえなおすと、次のように指摘できると思われる。

中曽根「新国家主義」のイデオロギーは、「新京都学派」の「日本文化論」にみられるように、「新自由主義」の市場万能論や競争主義の強調ではない。

そうではなく、市場万能論や競争主義を隠ぺいするために、梅原猛の「和」や山崎正和の「柔らかい個人主義」や今西錦司の「平和に共存」して「棲（す）み分け」が強調されている。

ゆえに、第1期「1980年代の中曽根内閣と臨時行革路線」のイデオロギーは、市場万能論や競争主義を強調する「新自由主義」のイデオロギーとしては、まだ成熟していないといえる。しかし、市場万能論や競争主義を強調する本格的な「新自由主義」のイデオロギーの先導役と補完役を果たすものとして成立しているといえる。

[参考文献]

- ・ 鯨坂真、他 『「日本文化論」批判と臨教審』 あずみの書房 1987年
- ・ 鯨坂真、他 『現代日本文化論の研究』 白石書店 1991年
- ・ 二宮厚美 『現代資本主義と新自由主義の暴走』 新日本出版社 1999年
- ・ 友寄英隆 『新自由主義とは何か』 新日本出版社 2006年

(くろだ はるお 大阪総合福祉専門学校教員)